

文部科学省

令和3年度

身近なところから
始めよう!

消費者教育 フェスタ

in
東京

成年年齢引き下げに伴う消費者教育の向き合い方

議事録



目次

1. **基調講演** 3
犬童 一利 氏 「映画で問う 18 歳の自由と責任」
2. **行政説明** 10
文部科学省
消費者庁
3. **実践事例報告** 13
①竹下 浩子 氏 「SDGs を意識した消費者教育の推進～愛媛県の事例～」
②荏原 智美 氏 「大学・高校と連携した不当表示広告調査」
4. **グループディスカッション** 41

基調講演

映画で問う 18歳の自由と責任

映画監督

犬童 一利



映画で問う 18歳の自由と責任

2022年2月10日 犬童一利

1



監督 犬童一利 (Inudo Kazutoshi)

1986年生まれ。神奈川県出身。中央大学商学部卒業。
2年間、一般企業で営業を経験した後に映画界へ。

『カミングアウト』(2014年)
第23回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 上映作品

『つむぐもの』(2016年)
出演：石倉三郎、キム・コッピ、吉岡里帆
第19回上海国際映画祭 正式出品

『きらきら眼鏡』(2018年)
出演：金井浩人、池脇千鶴、安藤政信、杉野遥亮
第21回上海国際映画祭 正式出品



2

ませんでした。こういう貴重な機会をいただけて、自分なりの視点で精一杯、頑張らせていただきますのでよろしくお願いいたします。

改めて、「映画で問う 18歳の自由と責任」という形で、本日はお話をさせていただきたいと思っております。

まず簡単に私の自己紹介をさせていただければと思います。先ほど、司会の方からいただいたように、映画の専門学校とか、芸術系の大学を出たわけではなく、2年間、会社員で営業をしていました。24歳の頃に、このままでは面白くないなと思って、会社を辞めて映画監督になるといって、この業界に飛び込みました。

本当に人に恵まれて、映画を撮ることができまして、ここに何本か映画館で公開をした作品を書かせていただいておりますが、そういうご縁もあって、今回、先ほどご覧いただきました『18歳』の短編映画の監督をさせていただくことになりました。

犬童：ただいまご紹介いただきました、犬童一利と申します。本日はよろしくお願いいたします。

まさか、自分がこういう場所で講演をさせていただくことになるとは、この作品を作ったときは思いもし

大人とは？

3

皆さん、オンラインの方も、本編を同時にご覧いただいたかと思うのですが、いかがでしたでしょうか。

ここで、皆さんに、質問をさせていただきたいと思います。「大人とは？」皆さん、こう聞かれたら、なんて答えますか。ちょっと考えてみていただけますでしょうか。

私自身、今回この作品を制作するに当たって、幾度となく考えた問いではあるのですが、よく日常では「子どもっぽいよね」とか、「大人っぽいよね」「子どもなんだから」「大人なんだから」という会話を、私自身もすることが多いのですが、じゃあ、子ども、大人って、どういう線引きでされているんだろうとすごく考えたんです。

人それぞれ、皆さんの意見もいろいろ聞いてみたいと思いますが、明確に、1つの線引きとして定まっているものが法律なのかと思っています。20歳から18歳に成年年齢が引き下がるという、非常に今回、大きな法改正が行われることとなりまして、これを機に、「大人とは？」ということを私自身すごく考えましたし、皆さんが考えるきっかけになったらいいなと思っています。

先ほど、ご覧いただきました映画ですが、どうして、この映画を作ろうとなったのか。その制作の過程においてのお話をさせていただければと思います。

「製作の経緯」

- ・ 教育図書との出会い (2019年5月)
- ・ 「家庭科」の価値観の変化
- ・ 18歳成人の浸透度

この映画は、基本的には高校の家庭科の授業で流す映画です。これから、いろいろな場所で流れることを期待しているのですが、ベースとしては家庭科の授業で流すための映画として作りました。制作元が教育図書さんという、高等学校の家庭科の教科書をメインとして出版をしている教科書の会社さんですけれども、その教育図書さんにご縁があり出会うことができました、この映画を作ろうというようになりました。

この映画を作るきっかけになったのが、2019年5月と書いてありますように、3年近くも前に、実は企画は始まっておりました。教育図書さんの横谷社長とお

会いして、いろいろとお話をする中で、初めて会ったとは思えないくらい、意気投合して盛り上がったわけです。その理由というのが、この家庭科という授業に関しての私自身の価値観の変化があったからです。

皆さん、家庭科の授業って、何を習ったか、どういう印象、記憶がございますか。私自身、正直、調理実習とか、裁縫とか、そのようなイメージが非常に強かったんです。これは周りの友人、仕事仲間にも聞いても、ほぼ似たような回答でした。

ただ、それはきっと小学校、中学校の記憶も混ざっていると思っていて、高校の家庭科の授業で、何をやったかなと思い出そうとしたのですけれども、こういうお仕事をさせていただいている中で言うのも恐縮ですが、正直ほとんど覚えていなかったんです。教育図書さんにお会いしたときに、正直にそういうお話もしたところ、教育図書さんも同じ意見をいただくことはすごく多いということでした。

では、家庭科の授業って、何をやっているのか。その場所で教科書を一緒に開いて、目次を拝見させていただいたのですが、非常に印象深かったのが、私自身が作ってきた映画のテーマともすごくシンクロをしていたのが一番の印象でした。例えば介護のこと、共生社会のこと、性のこと、発達のこと、保育のこと、地域のこと、そして、消費生活のこと、そのような目次を見て、こういう科目だったんだと、再発見したといえますか、結構、衝撃だったのです、それが。

受験の科目ではないので、結構、生徒の子たちも、いつてみたらなめてかかるというか、ちょっと休憩みたいな感覚を持っている生徒も実際いるんだろうなとすごく思いましたし、そのような印象を持たれているという声も聞いています。

教育図書さんがテーマとして掲げているのは、「家庭科は人生の必修科目」だとおっしゃっていました。学校を卒業したら教科書って結構捨ててしまうものだと思うのですけれども、「家庭科の教科書は絶対役に立つからととけ」と言っておられる先生もいらっしゃるそうです。その内容を改めて見たときに、すごくそれは腑に落ちて、そこで、ものすごく私自身も盛り上がったんです。今まで自分が作ってきた作品との親和性もあって、教育図書さんとも大いに盛り上がって、この短編映画を作ろうとなりました。

先ほど申し上げたような、いろいろなテーマで、この短編映画を作ることは想定していたのですけれども、当時2019年に、3年後に法改正があり成年年齢が引き下がるということをお聞きし、私はそこで、まず18歳成年のことを知りました、その事実を。周りでも知っ

ている人はほとんどいなかったと思います。すごく大切なことだよねと。トラブルに巻き込まれることは容易に想像つくというのは、そのときに私自身も感じたので、18歳成年をテーマに映画を作ろうというようになりました。

「作品のテイスト」

- ・教材なのか？映画なのか？
- ・生徒たちの情動に訴えかける
- ・アクティブラーニング

5

続きまして、この映画を作るとなったときに、一番、我々としても大きな部分でいうと、教材なのか、映画なのか、作品なのか、というところがありました。最初に、教育図書の社長は、「生徒の情動に訴えかけるものを作りたい」「教育ビデオではなく、生徒たちの心を揺さぶるようなものを作りたいんです」と言われました。なので、私としては映画を作ろうと、映画のメンバーで製作しようと思いました。

ご覧いただいたとおり、結構、余白を入れておりました、考えてもらいたいなってすごく思っていました。これこれ、こうだからこうです、このシーンはこういうことだとわかりやすくするという手段も、もちろんあったのですが、生徒に受動ではなく、主体的に前のめりになって、この作品に触れてほしい、自分で考えてほしいなという思いがすごく強かったので、このような構成にしました。

アクティブ・ラーニングという言葉がありますが、主体的に考えてもらうということが非常に大切だなと思って、このような作品にしました。

「設定に関して (1)」

なぜ「ものなしマルチ」を選んだか？

→ **加害者**にもなる怖さ、時代の流れ

設定に関してですが、今回、「ものなしマルチ」というものを選択しました。なぜ、この「ものなしマルチ」に設定をしたかといいますと、加害者にもなる怖さ、これが一番の理由です。よくあるのは、被害者にならないように気をつけようねというアプローチです。被害者になったときに失うものを注意喚起としてはされがちだと思いますけれども、このマルチの怖いところといいますか、ほかのことにも言えることですが、加害者になることで失うものがすごくある。特に、この世代の高校生、大学生の人たちの人間関係、自分の将来ということに対して、黒く塗りつぶされてしまう、ものすごく人生の今後を左右する大きな出来事になると思います。ただ何十万円、もっと大きい桁かもしれないですけども、お金を失うだけではなく、巻き込んでしまったことでの周りとの信頼関係、自分の将来、そういったものを失うという怖さを描きたいなと思って、このテーマにしました。

もう1つは、時代の流れです。昔、私自身が学生時代の頃は、マルチというと、例えば化粧品とか、モノが介在するケースが非常に多かったと思います。昨今、仮想通貨であったり、情報商材だったり、モノが介在しなくてもお金の流れが移り変わる世の中になってきているので、リアリティを出すためにも、この「ものなしマルチ」をリサーチの結果、テーマとして選びました。

「設定に関して (2)」

・現場の家庭科教員からの意見

→ 生徒たちが「**大人になりたくない**」
となるのは避けたい

→ 主人公の設定変更

・弁護士の監修

→ 劇中で描いていない部分などの裏設定

7

そして、現場の家庭科の先生たちとも打ち合わせをして、ご意見をいただきました。非常に大きなご意見として、「生徒たちが大人になりたくない、そのように思うことになるのは避けたい」ということでした。家庭科の授業で伝えていくことがとても多くなると思いますが、きっと学校では、ほかのシチュエーションでも、いろいろなタイミングで、この18歳成人のことは生徒たちにアナウンスされると思います。しかし、基本的にアナウンスされる内容は、「気をつけようね」とか、「リスク」とか、そちらのほうがすごく多いと思

われます。

この映画でどん底を描いてしまったら、生徒たちが、「大人になるのって怖いよね、大人になりたくないよね」と思ってしまう可能性がある」と言われました。これには脚本家も大いに納得をしまして、そうはなっほしくないと思い、主人公の設定を変更しました。当初は、誘う側、髪が長い大人っぽいアカネちゃんのほうが主役でした。それを先生たちにご意見をいただき、ユミという人物を生み出して、あのような結末を迎えるという形にしました。

もう1つ、弁護士の平澤先生に監修をいただいております。劇中で描いていない部分、シーンとシーンの間に何が起きたのか、今回は全てを描いてはおりません。その中で、どういうことが起きていたのか、どういう手順で行われていたのか、実際こういう場合って捕まる？ 罪に問われるの？ そういった部分を映画だから、ふわっとさせていいよねってことは、今回はしてはいけないなと思いました。きっと現場の先生たちもそれでは困るでしょうし、そこに関しては製作陣において、しっかり法的な監修を受けて裏付けを持って作りました。

「当事者世代からの反応」



「生々しくて気持ち悪かった」
「自分も似た経験がある」
「自分も誘いに乗ってしまうかも」

昨年、ロケ地である東京の錦城高校で、上映会をさせていただきました。そのとき、メインキャストの皆さん、高校の生徒会の生徒たち、教育図書の横谷社長と私で、トークセッションを行ったのですが、この写真はその様子になります。そのときにいただいた感想で、非常に印象的だったのが一番目にある、「生々しくて気持ち悪かった」という言葉を当事者の世代の高校生の子たちからいただいたのがすごく印象的で、うれしかったです。「こういう映画はスクリーンの中の話だよ」というように受け取るようなそんな映画も、もちろんいいと思うのですけれども、今回はしっかりやりたかったという思いがありました。

あとは、私自身が大切にしているテーマとして、現実との地続き感というものがあります。映画だから、

そうよねではなくて、自分だったらどうなんだろう、この役はこういう気持ちなんだと感情移入できるとか、そういう部分がすごく重要だと思っているので、この感想は非常にうれしかったです。

また、当事者意識といいますか、「自分も似た経験がある」「自分だったらユミみたいにのっちゃうかもしれない」そういった感想もいただいたのは非常にうれしかったです。



ありがたいことに、昨年12月頃から取材をいただくことが非常に増え、ご覧のとおり新聞、テレビなど、メディアに取り上げていただくことが多くなってまいりました。正直、企画をしたときから、成年年齢引き下げのことは、全然知られてないんだなということはずっと思っていて、昨年の7月に撮影をしたときでも正直、肌感覚としてはあまり取り上げられている印象はなかったんです。こんなに大きな法律の改正なのに、全然見ないなど。自分がこの映画に携わっていなかったら、知らなかったのではないかとすごく思ったのですが、成人式、施行される今年4月に向けて、この12月から年が明けて、特集をされることも多くなったと思います。やっと世の中にメディアとして取り上げられる機会が増えてきたのかなという印象を持っています。これは必要なことだと思っています。

「映画で問う意味」



- ・興味関心 (エンターテインメント)
- ・登場人物を通しての感情移入
→ 知識だけじゃない体感
現実との距離感、当事者意識
- ・解釈の多様性、議論の創造
- ★ 記憶の定着 → 「実生活」での想起

今回の講演のテーマである「映画で問う」という意味について、自分でも改めて考察してみました。

まず1つは、エンターテインメントによる興味・関心です。特に今回、教育関係者の方に多数ご視聴いただき、会場にも来ていただいていると思いますが、生徒たちに、まずちゃんと向き合ってもらいたいなと思ったんです。もちろん、活字であったり、授業であったり、こういうシンポジウムとか、冊子など、そういうものも大切だと思いますが、授業で映画が流れるとなると、生徒たちも、ちょっと色めき立つというか、映画が流れるんだという印象があります。「今日、いつもの授業となんか違うぞ」「なんか映画を見れるんだ」という、まず一步、前のめりになってもらうという部分では、このエンターテインメントの力は非常に大きいなと思っています。

もう1つ、先ほど申し上げました、人物を通しての感情移入、知識だけではない体感、現実との距離感、当事者意識です。結局、他人ごとだと思われてしまったら、あまり意味がないなと思っています。どういうときに記憶に残るのかなと考えると、感情が動いたときだということを今、自分の中で振り返ってすごく思っています。ただ情報がインプットされるのでは、もしかしたら右から左に流れてしまうかもしれない。知識としては、そのときインプットされるかもしれないけれども、一週間後には忘れてしまうかもしれない。なので、感情が動く、自分の身近で近いことが起きていると思うことが大切です。

ニュースにしても、そうだと思います。自分のいる半径数メートルとは全く関係のないニュースよりも、例えば家族にすごく関係があること、自分に関係があるニュースだと、気持ちが動いて印象に残りますし、当事者意識が芽生えるので、そういう部分がすごく必要だなと思っています。ただの知識だけに留まらない感情、体験というものは、映画で伝えるという意味において適していると思っています。

もう1つ、解釈の多様性と議論の創造。今回、エンディングも含めてですけれども、決してわかりやすい、こういうものですよという作りにはしていません。それは先ほど申し上げました、アクティブ・ラーニングで、生徒たちに主体的に考えてもらう、自分たちの意見を言ってもらおうということがすごく大切だと思っているからです。いろいろな解釈があっていいと思いますし、そうあってほしいなと思います。

例えば、ユミは被害者だけなのか。でも、待てよと、アカネが発覚するのが、あと一週間遅かったら、ユミも誰かを誘っていたかもしれない。その場合、「ユミっ

て加害者だよね」、そういう議論が授業で行われてほしいなとすごく思っているんです。「私は、全然ちょっとユミの気持ち分かんない」「私は分かる」「なんで、ユミやるって言ったの」とか、そのときの気持ちは、人それぞれだと思います、見ている人たちは。正解はないといえますか、制作側の意図はありますけれども、そういうものを引き出して、議論になることによって多様性、いろいろな価値観に触れること、主体的に考えることで、身に入っていくのかなと思っています。

まとめると、記憶の定着です。結局、いくら情報として入ったとしても、実生活で生きないと意味がないと思っています。実際に今回のようなトラブルのケースについて知ってはいるけれども、その瞬間に思い出さなかったら意味がない。細胞にまで染みわたらないと意味がないなと思ひまして、この「映画で問う」ことの意味、ずっと申し上げていた部分は、結局はその世代の子たち、周りの人間がきちんと実生活に、体験、思い、知識というものをちゃんと生かせるかということ、それがすごく大切だなと思っています。それが一番だと思っていますので、形式上、知識としてやりまただけでは、本当に意味がない、18歳の瞬間だけではないと思うんです。

このようなトラブルなど、人生の大切な決断をするシチュエーションは、きっと19歳、20歳、そこから先もずっと続く、とても普遍的な話だと思っています。自分が決断を迷ったタイミングで、いかに思い出してもらえるかが、すごく大切になりますので、「映画で問う」という意味については、今回、改めて自分自身も感じさせていただきました。

「誰に届けるか」

(騙すプロ・大阪の事件)



- ・ 当事者世代
- ・ 保護者、教育関係者 (Ex: 養護教諭)
- ・ 地域 (上映会で世代を超えた議論)

→ 「大人とは？」をみんなで考えるきっかけ

11

最後に、誰に届けるかという部分ですけれども、「騙すプロ、大阪の事件」と書かせていただきました。この騙すプロというのは、先ほどの高校での上映会の際に、教育図書の横谷社長が高校生に向けてお話ししていたことです。「騙すほうは騙そうと思って来ます、騙すプロです」とおっしゃっていたんです。巧妙に仕掛

けてきますと、それがすごく衝撃で、改めてそうだなと、彼らはそれで食っているわけで、悪いことですが、それは巧妙だよなと思いました。

劇中でもありましたが、夢とか自己実現の話は、響きやすい。あとは、ユミみたいな、ちょっと何をやりたいか分からない子たちにも、結構、刺さる言葉だと思います。そういうものを巧みに使ってくるという印象はあります。

私自身、会社員から映画監督になるといって会社を辞めたあと、今、思えばですけども、そういう誘いもあったと思います。やりたいことをやるためには、まずは生活をちゃんとすること。「不労所得を得て、毎月ちゃんと生活をして、それでやりたいことに没頭するのがいいんだよ」って言われました。確かに、と思いました、そのときは。結果的には、ちょっと自分で調べたら結構わかりやすいマルチ商法だったので、私はそこから離れましたが、自分自身の体験を考えても、そういう言葉に盲目になりがちだということは、すごく感じています。

もう1つ、大阪の事件ですけども、18歳ではありませんが、22歳の大阪の女の子の話が朝日新聞の記事に載っておりました。お金を150万円くらいキャッシングして、マルチにつき込んだ。彼氏には相談できたけれども、親には心配かけるので相談できなかった。どんどん悩んで、自分で抱え込んで悩んでいって、精神的に病んでしまい、結果、自殺してしまった。

その記事を読んだときに、この映画でも、かなりアカネを落とすっていうところ、残酷なエンディングを意識したのですが、現実のほうが残酷だと、すごくそのときに感じまして、自殺まであり得るということをすごく思いました。なので、すごく大切なテーマであり、みんなで考えていかなければいけないことだと感じています。

誰に届けるか、1つは、当事者世代、今回の作品の用途でもある高校生あるいは大学生です。特に、地方から大学1年生で上京してきたような子がめちゃくちゃ狙われるのは、もう目に見えているなど、自分自身ですら思います。

もう1つ、保護者。保護者の世代の意識です。

あとは、今日もご覧になっていただいているかと思いますが、教育関係者の方々がどれだけ知識として、プラス感情面、どういう巻き込まれ方、どういう心理でそういうことになってしまうのか、そのときに、どういう悩みを抱えているのか、二次被害として、ということが想定されるのか、ということを知っておくのはすごく大切だなと思っています。

先日、養護教諭向けの教材を出している出版社より取材を受けたのですが、保健室の先生もすごくキーワードになります。何かトラブルや問題を抱えた生徒が集まりやすい1つの場所だと思います。なので、家庭科の先生だけではなく、教師間の連携というものをこのタイミングで行っていただくことは、すごく大切であると。これは別の先生の言葉をお借りさせていただきますが、これを機に、科目ごとの先生で、私がこの領域とかではなくて、教師間の連携となる1つのきっかけになったらいいなと強く思っています。

当事者、家庭、教育・学校、それともう1つ、最後に地域です。地域で、こういうテーマに目を向けることはすごく大事だと思っています。高校の授業の教材として作られた映画ですが、私自身は地域で上映会などをさせていただいて、いろいろな世代の意見交換をしてもらうことがすごく大切だと思っています。きっと子ども、大人など、ライフステージや年齢によって価値観は変わってくるものだと思うので、意見交換をして、地域全体でアンテナを張る、考えを持つということは、これからの日本にとってすごく大切だと思っています。

まとめますと、冒頭で問題提起、質問をさせていただいた「大人とは？」という問いをみんなで考えるきっかけになる、そんな法改正なのかなという解釈を自分の中ではしております。いろいろなトラブル、いろいろな切り口、巻き込まれないようにということもあるとは思いますが、このテーマをきっかけに、「大人、子どもってなんだろう」と日本全体で考えていくポジティブな意味でのきっかけにできるような法改正だと思いたいなと、改めて今回、自分の中でも強く思いました。また、映画という意味で、何かそういうアプローチができたらいいなと強く思いました。

皆さん、いろいろな立場の方がいらっしゃると思いますが、ちょっと変わったアプローチの仕方になるかもしれませんが、とにかく感情であったり、そういうものを私はすごく大切だと思っていますので、何か皆さんのご活動のきっかけになったらうれしいなと思っています。

それでは、本日の講演を締めさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会：ありがとうございます。私自身、若い娘を持つ母親として、今の監督のお話、全て心に刺さり、震えながら聞いておりました。

最後に、犬童監督から当事者世代の皆様に向けたメッセージを1つお願いできますでしょうか。

犬童：当事者世代の皆さん、先ほどの話と重複しますがけれども、「気をつけて」とか、「危ないね」と言われることはすごく多いと思います。実際、先ほど申し上げたとおり、騙すほうは騙すプロなので、めちゃくちゃ巧妙に近づいて来ると思います。騙されている確信があって、お金を注ぎ込む人はおりませんから、気づかないうちに騙されてしまうんです。

なので、1つは、騙すプロが世の中にはいるんだということを思ってください。何かあったら周りに相談をしてほしいと強く思います。とにかく誰でもいいです。何かあったら相談をしてほしい、なるべく顔の見える相手のほうがいいと思います。

もう1つ最後に、こういうトラブルとか、すごく嫌なこと、気をつけてねということがどうしても多くなりがちだと思いますけれども、18歳で大人になることによって、できることや可能性は絶対に広がると思います。なので、やりたいことがある人は、そこに向き合う。やりたいことがない人でも、18歳で大人になることをきっかけに、自分は何をやりたいんだろう、どんなことに興味があるんだろう、自分ってどんな人間なんだろうというように自分と向き合う1つのきっかけに、この法律改正をポジティブに捉えてもらえたら、うれしいなと思っております。

これからの日本を支えるのは、みんなの世代だと思いますので、共に日本を明るくするきっかけにできたらいいなと思っております。以上です。



ご静聴ありがとうございました。